

## 第 35 回高専プロコンの講評

第 35 回高専プロコン（奈良大会）

審査委員長 大場 みち子

審査委員長の京都橘大学の 大場みち子です。審査委員長として講評を述べさせていただきます。

全出場校のみなさん、参加部門完走お疲れさまです。各部門の受賞チームのみなさん、おめでとうございます。

第 34 回福井大会に引き続き、第 35 回奈良大会も現地の素晴らしい会場で開催ができました。開催に関与いただいたみなさま、特に、主管校の奈良工業高等専門学校の前藤校長他のみなさまのご尽力に、心より感謝いたします。今回は過去最高の参加校数となり、大変うれしく思っています。

課題部門の今回のテーマは、「ICT を活用した環境問題の解決」です。新規テーマということもあり、新鮮なアイデアが満載の充実した作品が勢揃いしました。

全体的に、プレゼン能力や技術力が高く、完成度の高い作品が多数ありました。

今回のテーマに対して、問題解決のアプローチやストーリーを明確にすると、より高い評価が得られたでしょう。多数の作品に AI が適用されていましたが、AI の適用が最適かどうかを再考することも大切です。

自由部門では、「自由なテーマで独創的な作品」ということで広い分野で独創的な作品が多数登場しました。自由部門も元気な発表が多く、プレゼン力が大幅に向上しました。デモンストレーションでは、楽しそうに説明する姿がとても印象的で、モチベーションアップにつながっていると感じました。実用化されている作品やオープンソースとして公開されている作品があり、感心しました。また、高専内のお風呂の混雑状況やシャワー・洗濯機の使用状況がわかるシステムを開発したチームは、他校から利用したいとの要望に即応して、ソースを公開して利用できるようにしたことです。残念だったことは、デモンストレーションに対して、プレゼンテーションでは十分に説明ができていないチームが散見されたことです。プレゼンテーションでは、システムの特徴をしっかりとアピールしてください。

課題部門、自由部門共通のコメントです。

ツールやライブラリの利用が進んでいますが、設計段階でシナリオをより深く考えて適用

するとよりよい作品に仕上がります。

作品は完成して終わりではなく、他のユーザに利用してもらって、システムの評価を行い、しっかり改善のサイクルを回すことが望ましい開発の姿です。開発スケジュールの中にシステムの評価を組み込むことを推奨します。デモでは通信環境に備えた準備することも必要です。もしものときのために、動画の準備などをおきましょう。

競技部門の今回のテーマは、「シン・よみがえれ世界遺産」でした。問題の特徴をある程度考察し、それをうまく効率化につなげるアイデアのあるプログラムが上位に残りました。一方、機械学習などの大道具を持ち出した結果、実装しきれないグループも見受けられました。特に「手数を気にしなければいつでも解ける」という性質を見抜いて、それをベースに改善したチームがよい成績を収めていました。最後に、昨年度は半自動化がよい結果につながったチームもありましたが、今年は人手でやる部分が本番でうまくいかずに残念な結果になったチームもいましたので、このあたりの工夫はしっかり検討してください。

最後に、審査委員長としてのコメントです。

今回の高専プロコンで特に印象に残ったのは、皆さんのプレゼンテーション能力が大きく向上していたこと、マニュアルも実際の作品と整合性がとれていたことです。これは学生の皆さんの努力だけでなく、先生方のご指導の賜物であると思います。おかげで、従来、高専生の課題として挙げられていたプレゼンテーション能力やライティング力の向上が大きく改善できていると実感しています。

さらに、多くのプロジェクトが「キュリオシティ・ドリブン」、つまり日常の疑問や興味から生まれた好奇心に基づいている点も素晴らしいと感じました。好奇心が原動力となって新しいアイデアが生まれ、そこから革新的な解決策が導き出される可能性を強く感じることができました。

エンジニアとして「役に立つものを作りたい」という外発的動機も重要ですが、変化の激しい社会においては好奇心という内発的な動機が大切です。そしてその好奇心に基づいたプロジェクトは、伝える力が伴って初めて価値が広がります。プレゼン力を磨くことで、皆さんの夢や価値が多くの人に伝わるでしょう。

この高専プロコンは皆さんが夢を実現するための技術を磨く場であり、これからも全力で応援します。この大会はゴールではなく、新たなスタートです。今後も学びを活かし、前進してください。

以上で、審査委員長の講評とさせていただきます。